

神武天皇が我が国を開いて今年は2677年にあたる。

昨今の世の中を見ると、我々が働いたあの刹那はこの2677年間の中で一番良い時代ではなかったのではないかと思えてくる。

昭和20年（1945年）、戦争が終わり、爆撃で荒廃した国土から日本は立ち上がった。

幸いと言ったら当事国に失礼ではあるが、1950年～1953年の朝鮮戦争により、戦争特需が発生し、日本の経済にプラスに働いたことは確かであろう。

そして、この50年代が日本経済発展のスタートであった。

1. 生産性向上運動

当時50年代、米国で日本製の「ードル・ブラウス」が売られていた。

米国人は品質より価格を優先する人が多いのではないだろうか、よく売れたようである。

また、当時の日本製品は「安かろう、悪かろう」とも言われていた。

何故この様な低価格で物が作れたのか？

それは日本人の人件費の低さから低価格の製品が可能になった。

そこで、池田勇人大臣の「10年間で国民所得を倍増しよう」という運動が始まったのである。

この運動の骨子は「製品の価格を値上げせず」に勤労者の所得を倍増することにある。

簡単に言えば生産性を高めるという事である。そして我々は全社的または全工場的規模でこの生産性向上運動に取り組んだ。

生産性向上と云うと工場の操業現場の問題と思われがちだが、事務部門もこの運動に参加しての全工場による運動であった。

給料袋裏面の給料明細欄は手書き>インパクトプリンター>ノンインパクトプリンター>銀行振り込み

とものすごい省力化が図られた。

それで、我々はこの生産性向上運動は10年の目標を7～8年で成し遂げた。

2. 品質向上運動

日本の高度経済成長に最も貢献したのはW.エドワード・デミング博士だと私は思っている。

1950年代、日本の企業はデミング博士の思想を取り入れ、我々は統計的概念をしり、統計的手法を工程管理、製品管理等に用い、品質の維持向上に努めてきた。（クオリティー・ファースト）

その結果、日本はリーズナブルの価格で良い品質の製品を世界に提供してきた。そして世界の市場から製品の信頼性を得ることが出来た。

デミング博士について

彼は1950年、日本の国勢調査の計画・立案関係の仕事で来日した。

その折、日科技連との接触があり、日本の企業人に講習会を開くなどして、彼の思想が日本中に広まった。

デミング博士は米国人であるのに米国産業界では彼は無名の人であった。

私の考えでは、米国産業界の人々はT型フォードの成功例が頭にこびり付いていた。（質より量を重んずる考え方） 所がデミング博士の思想は「量より質」だったのでデミング博士の思想はうけいれられなかったのであろう。

1980年代、米国は日本の経済的発展の陰にデミング博士がいることを知り、フォードは彼に助言を求めた。所が彼は品質管理の事ではなく、経営についてアドバイスしたという。品質問題は日本人にはできたが、米国人には出来ないと判断したのであろうか？

3. むすび

日本の高度成長はデミング博士から彼の思想を頂戴しましたが、それ以外は全て我々日本人が行ったものです。（昨今の中国をはじめとする開発途上国の経済的発展は先進国が行ったもの。サウジの様に原油を輸出して儲けて経済発展した国もありますが、下手するとベネゼイラの様になります）

そのうえ、生産性の向上運動と製品品質の向上運動を同時にやってのけたのです。

そして世界第2位（当時）の経済大国になった。こんな国、日本以外に出来る国あるだろうか。

最後に一言

私は、モノ作りは人だと思えます。実際に作業する操業者の心だと思えます。

日本の操業者の潜在能力は世界一ではないかと思ってます。（以前、産経新聞にOECDが行った成人力調査の事が書いてありましたが、日本のブルーカラーの能力は非常に高いと書いてありました）

そのためには 労使間の富の分配の適正化、労使協調、愛社精神、終身雇用制、等が重要である、と思っ
てます。

以上

イタリア・ミラノの北東に「クレスピ・ダッタ」という世界遺産があります。

19世紀、ミラノにクリストフォロ・クレスピと云う人がいました。彼は宗教の道に進もうと思っていたのです。

所が、18世紀に起った産業革命がヨーロッパ中に伝播した。そしてこの産業革命で「労働者層」と「資本家層」の二つの層が生まれた。

資本家層は豊かな生活。労働者層は過酷な生活を強いられていた。

この現実を知ったクレスピは労働者の生活環境を良くすれば生産性が上がるのではないかと思い、

1875年 ダッタ川のほとりに織物工場、その他従業員に必要な施設、一軒家の社宅、教会、学校、生活必需品の店等々を作りました。

これが世界遺産になっているのです。

この労働者の村は、1929年に米国で起こった世界不況で閉鎖しました。



(00000

世界遺産 | 第310回

(話の出どころは TBSのTHE世界遺産 (第310回)

私は1960年から63年まで苦小牧工場に勤務しておりました。

苦小牧工場は明治末期に勇払原野を切り開いて工場を建てたので、従業員は全て社宅住まいでした。

社宅は木造一軒家。私が入社した当時はこの木造家屋がずら〜と並んでいました。

「世界遺産 クレスピ・ダッタ」に出てくる社宅を見ていて苦小牧工場の社宅群を思い出し、この世界遺産が私になつかしさを与えてくれたので覚えていたのです。

苦小牧工場の操業は明治43年(1910年)

水は支笏湖から流れ出た川の水。まず水力発電に使用、工場用水も支笏湖の水を今でも使用しています。

苦小牧工場使用の電力は60サイクル。東日本で60サイクルを使用しているのは工場及びその周辺の社宅・その他王子の施設(例えばアイススケートリンクなど)だけでしょう。

蛇足2

良い品質とは どの様な物か

商品を作るとき品質設計を必ず行う

例えば ある品質特性値を100.0と決めた。

特性値が決まり、製造条件が決まり、生産に入ったとする。

できた製品の品質測定値を測定した。

神様は全て100.0のものを作れる。(神業)

人間様が作ると100.0もあるが100.前後の値になる。(人間技はばらつきが出る)

このバラツキ状態を標準偏差で表せられる。

要するに標準偏差の値が小さいものが良い製品である

もう一つ重要な問題は商品寿命の事である

物には寿命がある

商品の使用している全てのパーツがある日寿命がきた。

これが最高の商品ではないだろうか

レーガン=サッチー時代、

英国はイギリス病、米国の経済もパツとしない。

そこで考え出したのが、人、金、物が国境を自由に行き来できる経済

それで、先進国（米国）は後進国の安い人件費を利用して、後進国（中国）に工場を作り、低価格の製品を作った。

この製品を後進国で販売するのであれば、何も問題は起こらない。

所が後進国の人々はその安価製品を購入する余力がない。（そんな事初めから分かっていたらろう）

その商品を米国で販売した。

その結果 米国製品は売れなくなる。工場が閉鎖し、失業者が増える。

失業者は再就職しなければならない。

一方、移民はどんどん増えてくる。

就職の需給バランスは需が減少し、給が増加する。

国民の生活はどんどん苦しくなってくる。

中国の廉価品を輸入・販売している人の懐は暖かいが、一般の人の懐はひえきっている。

そこで アメリカ・ファーストが出てきたのだらう。

上位8人の総資産=下位36億人の総資産

こんな状態で良いのでしょうか！！